



森本・上島原遺跡 II

—中町南小学校中校舎地震補強・大規模改修工事に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書—

付章 森本・村之内遺跡発掘調査概要



2009年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会

森本・上島原遺跡Ⅱ

— 中町南小学校中校舎地震補強・大規模改修工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

付章 森本・村之内遺跡発掘調査概要



2009年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会

序 文

森本・上島原遺跡は、中町南小学校敷地内に広がる、弥生時代末から平安時代後期にかけての複合集落遺跡です。平成元年に体育館改築に伴う発掘調査で発見されましたが、今回の調査でも竪穴住居跡等、連綿と続いてきたわれわれの祖先の足跡の一端が明らかになりました。したがって、現在、子供たちが元気に活動し、学んでいる当地は、約1700年前からの祖先の営みが積み上げられてきた地であるといえます。

当遺跡をはじめ、町内に多数存在する各時代の遺跡に残る祖先の活動の痕跡には、様々な情報が残されており、現在に生きる我々がそれを読み取り、未来へ生かしていくことは我々の責務であります。

当遺跡の発掘調査結果が、そうした、多可町の未来への指針の糧の一つとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査作業及び整理作業にあたり、多くの方々にご協力・ご指導をいただきましたことを厚くお礼申し申し上げます。

2009年3月

多可町教育委員会

教育長 小林 紀之

例 言

- 1 本書は兵庫県多可郡多可町中区森本字上島原に位置する森本・上島原遺跡の発掘調査報告書である。また、付章として森本・村之内遺跡の発掘調査成果を掲載している。
- 2 調査は多可町教育委員会が主体となり、森本・上島原遺跡は管理課課長補佐 安平勝利、森本・村之内遺跡は管理課副課長 宮原文隆が担当した。
- 3 森本・上島原遺跡の遺構等の実測は松田優子・藤田侑子・安平が行い、遺構及び遺物写真と遺物実測は安平が行った。
森本・村之内遺跡の遺構等の実測は藤原敏、笹倉崇司、宮原、遺構・遺物写真は宮原、遺物実測は小林千代美、早崎喜代美、宮原、トレースは早崎、吉田衣里が行った。
- 4 本書で示す標高地は、多可町建設課設定のB.Mを使用した値である。方位は座標北で示している。
- 5 本書記載の土器実測図断面は、弥生土器・土師器・土師質土器一黒、須恵器・陶器一白抜きとした。また、土器実測図において、中心軸に沿って内外面の成形・調整表現が上下一直線にわたって欠する土器は、遺存率及び歪み等のため復元径に問題があることを示している。
- 6 遺構の表記に際しては、次のように略したものがある。
竪穴住居跡・掘立柱建物跡—S B 溝—S D 土坑—S K 柱穴・柱穴状遺構—P
また、遺物実測番号は、金属製品—F、石製品—Sを付けた。
- 6 遺物には通し番号を付し、図面、写真、表の番号は一致する。遺物写真については、土器個別写真は原則として縮尺を1/3としている。
- 7 森本・上島原遺跡の遺物実測図は、基本的に3次元デジタイザーを使用して行い、すべてデジタルデータとして保管している。
- 9 本書の執筆・編集は、『森本・上島原遺跡』を安平、『森本・村之内遺跡』を宮原が行った。
- 10 本書にかかる資料は、兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 那珂ふれあい館で保管している。

本文目次

I	はじめに	
1.	地理的環境	1
2.	調査に至る経緯、調査体制	3
II	発掘調査の概要	
1.	竪穴住居跡	5
2.	土坑	9
3.	溝	10
4.	ピット状遺構	10
III	まとめ	
1.	森本・上島原遺跡の調査	11
2.	多可町の弥生時代の遺跡	12
IV	付章 森本・村之内遺跡発掘調査概要	
1.	はじめに	17
2.	調査の方法・調査期間・調査体制	17
3.	調査の概要	18
4.	小結	21

表目次

森本・上島原遺跡	土器観察表
森本・村之内遺跡	土器観察表
報告書抄録	

挿 図 目 次

【森本・上島原遺跡】

- | | | | |
|------|-------------------|------|------------------|
| 第1図 | 多可町位置図 | 第2図 | 位置図 - 1 |
| 第3図 | 位置図 - 2 | 第4図 | 遺構配置図 |
| 第5図 | 竪穴住居跡 | 第6図 | 竪穴住居跡出土遺物① |
| 第7図 | 竪穴住居跡出土遺物② | 第8図 | 土坑 1 |
| 第9図 | 土坑 2 | 第10図 | 土坑 3 |
| 第11図 | 土坑 4 | 第12図 | 溝 |
| 第13図 | P 1 | 第14図 | ピット状遺構及び包含層出土遺物 |
| 第15図 | 弥生時代前期遺跡分布図 | 第16図 | 弥生時代中期前葉～中葉遺跡分布図 |
| 第17図 | 弥生時代中期後葉遺跡分布図 | 第18図 | 弥生時代後期前葉遺跡分布図 |
| 第19図 | 弥生時代後期後葉～庄内期遺跡分布図 | | |

【森本・村之内遺跡】

- | | | | |
|------|--------------|------|-------------|
| 第20図 | 調査位置図 | 第21図 | 第1区遺構図 |
| 第22図 | 第1区出土遺物 | 第23図 | T 2～T 6 土層図 |
| 第24図 | T 2～T 6 出土遺物 | | |

図 版 目 次

【森本・上島原遺跡】

- | | | | |
|---------|-----------------|-----------------|--------------|
| 図版 1 | 周辺景（北方） | 周辺景（東方） | 調査前全景（北から） |
| 図版 2 | 調査区全景（南から） | | |
| 図版 3 | 調査区南側全景（南から） | 調査区全景（北から） | |
| 図版 4 | 調査区北側ピット状遺構群 | 竪穴住居跡 | |
| 図版 5 | 竪穴住居跡遺物出土状況（西側） | 竪穴住居跡遺物出土状況（東側） | |
| 図版 6 | 竪穴住居跡土層① | 竪穴住居跡土層② | 竪穴住居跡中央土坑部土層 |
| | 土坑 1 | 土坑 2 | 土坑 3 |
| 図版 7 | 土坑 4 溝土層 溝全景 | P 1 検出状況 | P 1 遺物出土状況 |
| 図版 8～11 | 出土遺物 | | |

【森本・村之内遺跡】

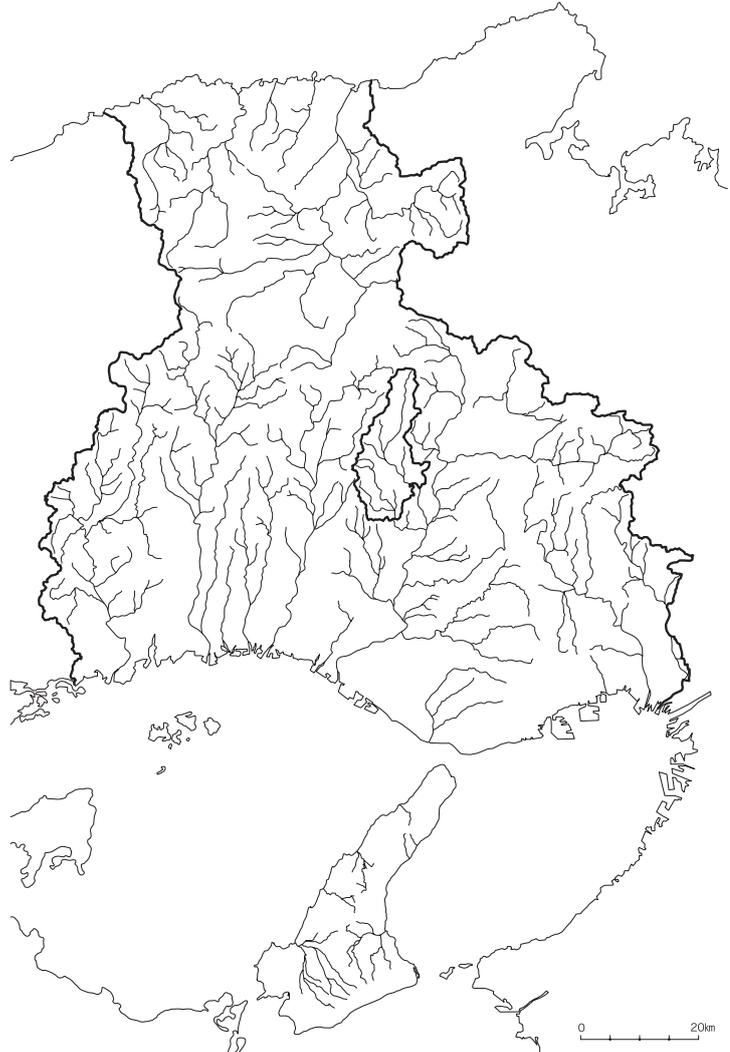
- | | | | |
|-------|---------------|----------|----------|
| 図版 12 | 調査前（南から） | 調査前（北から） | 石灯籠 |
| 図版 13 | 第1区溝 1 土器出土状況 | 第1区（南から） | 第1区（北から） |
| 図版 14 | T - 4 | T - 5 | 作業風景 |
| 図版 15 | 出土遺物 | | |

I はじめに

1. 地理的環境

多可町は、17年11月1日に旧中町、加美町、八千代町が合併して誕生した新町である。

当町から南方の神戸市沿岸部までは約45km、北方の豊岡市沿岸部までは約70kmの直線距離にあり、兵庫県のはほぼ中央部、播磨最北端に位置する。行政境は、北は丹波市、朝来市、東は丹波市、南は西脇市、加西市、西は神崎郡神河町、市川町にそれぞれ接しており、東西約13 km、南北約30 km、総面積185.15 k m²の町域を有する。町域の約79.8 %を山林地帯が占めており、特に町北部には標高692.6mの妙見山、939.4mの笠形山、1005.2mの千ヶ峰など600～1000m級の山々がそび



第1図 多可町位置図

える山間地帯である。町内は三国岳を源とする杉原川が加美区、中区の中央部を貫流し、笠形山を源とする野間川が八千代区の中央部を南流して谷底平野を形成している。

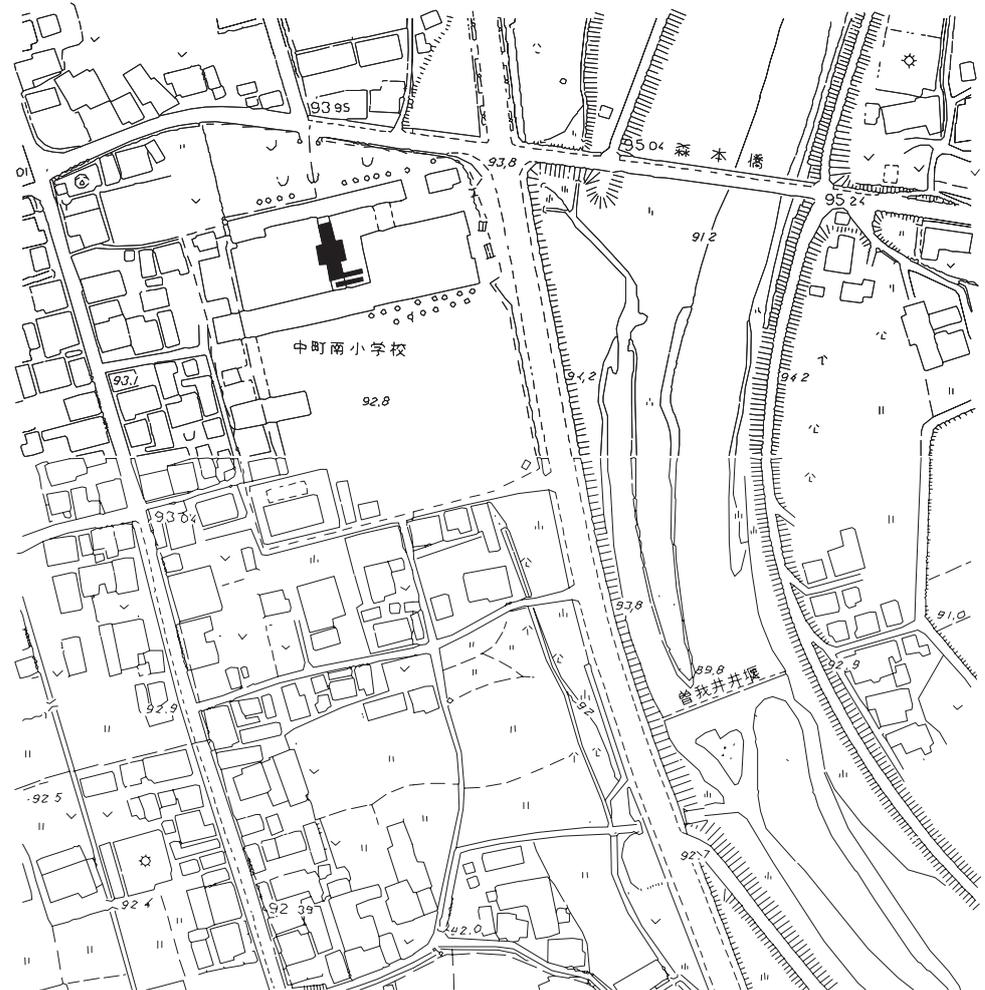
気候は、瀬戸内気候の影響下にあるが、内陸性気候の影響も受け、寒暖の差が比較的大きい。

主な産業は、古くから農林業、繊維産業を中心として発達してきたが、近年の経済、社会状況の変化、人口構成年齢の高齢化、過疎化など、農山村地域を取巻く状況が厳しい中であって、新たな産業の導入・振興が模索されている。

田野口・笹町遺跡は、中区にあり、中央を流れる杉原川によって、大きく北部平野、中央平野、安田平野に分けられるうちの北部平野北側に位置し、北方にそびえる妙見山の山裾、標高108.00m付近に広がる。



第2図 位置図-1



第3図 位置図-2

2 調査に至る経緯、調査体制

森本・上島原遺跡は、平成元年度に行われた中町南小学校体育館の改築に伴う発掘調査で見つかった遺跡である。

今回、中町南小学校において、中校舎地震補強・大規模改修工事が計画され、平成元年に行われた調査地の西隣の約100㎡について、記録保存のための全面発掘調査を行った。

【調査面積】 約100㎡（渡り廊下、トイレ敷設部分）

【本発掘調査期間】 平成20年6月17日～平成20年7月13日

【整理・報告作業】 平成20年6月～平成21年3月

【調査体制】

〈調査主体〉 多可町教育委員会

〈発掘整理作業〉 発掘・整理担当 安平勝利

調査補助員 早崎喜代美 松田優子 藤田侑子

〈発掘・整理作業従事者〉

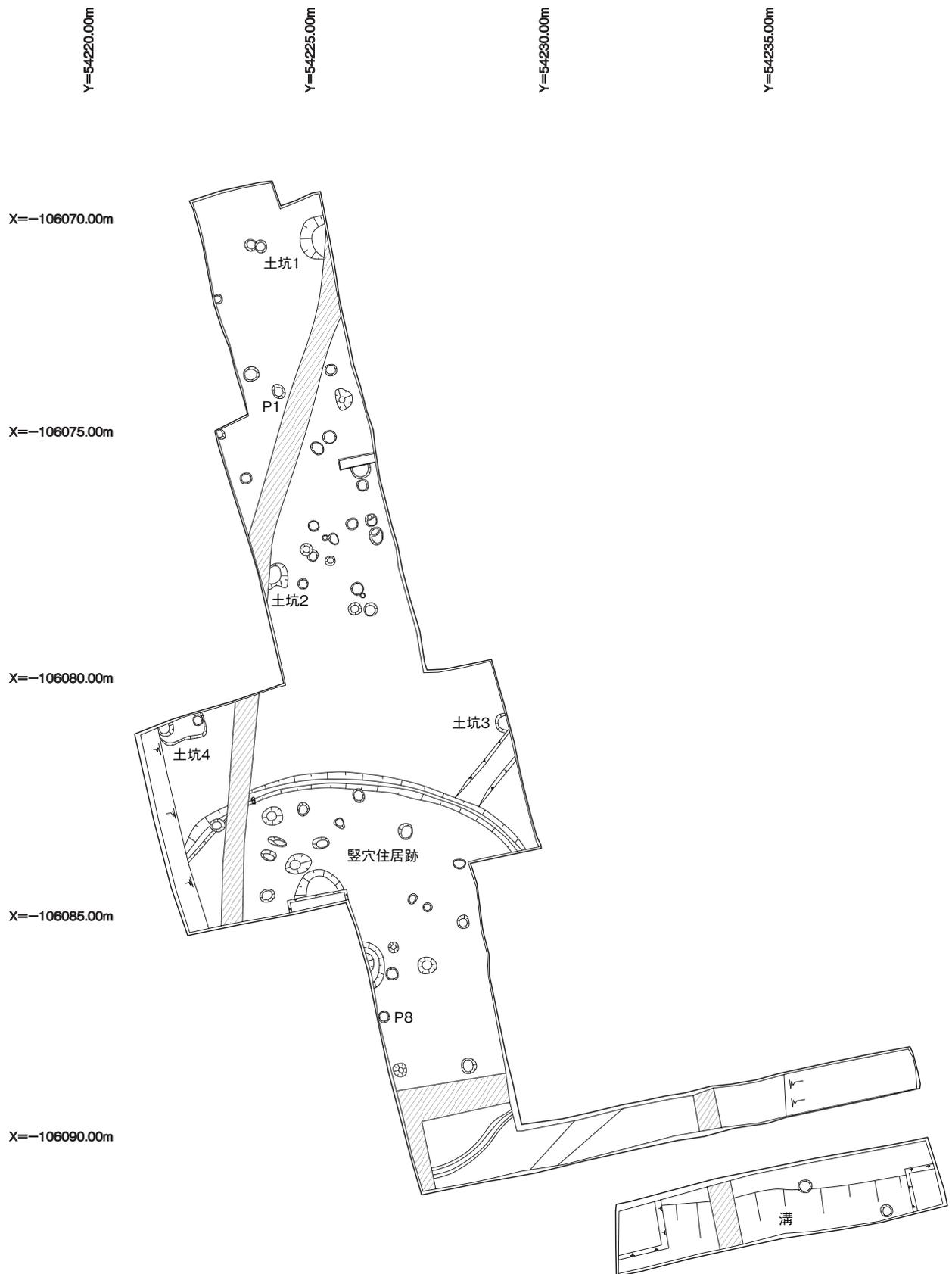
越川芳明 杉本正蔵 坪内梅吉 中道和三男 橋本己義 吉田衣里

〈調査・整理作業協力機関、協力期間〉

兵庫県教育委員会文化財室 中町南小学校

西脇市・多可郡広域シルバー人材センター多可町支部 藤本電気商会





第4図 遺構配置図

II 発掘調査の概要

基本層序は、調査区北側では地表面から約30cmの小学校建設時の整地層を除去すると、直下でにぶい黄褐色土の遺構面となる。南側では整地層下に約10cmの中世期の遺物を包含する暗褐色土が堆積し地山面となる。遺構内の埋土は、中世期の遺構内には暗褐色土が堆積し、弥生時代の遺構埋土には黒褐色土が堆積している。確認された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑3基、溝状遺構1本、多数のピット状遺構がある。以下主なものについて述べる

1 竪穴住居跡

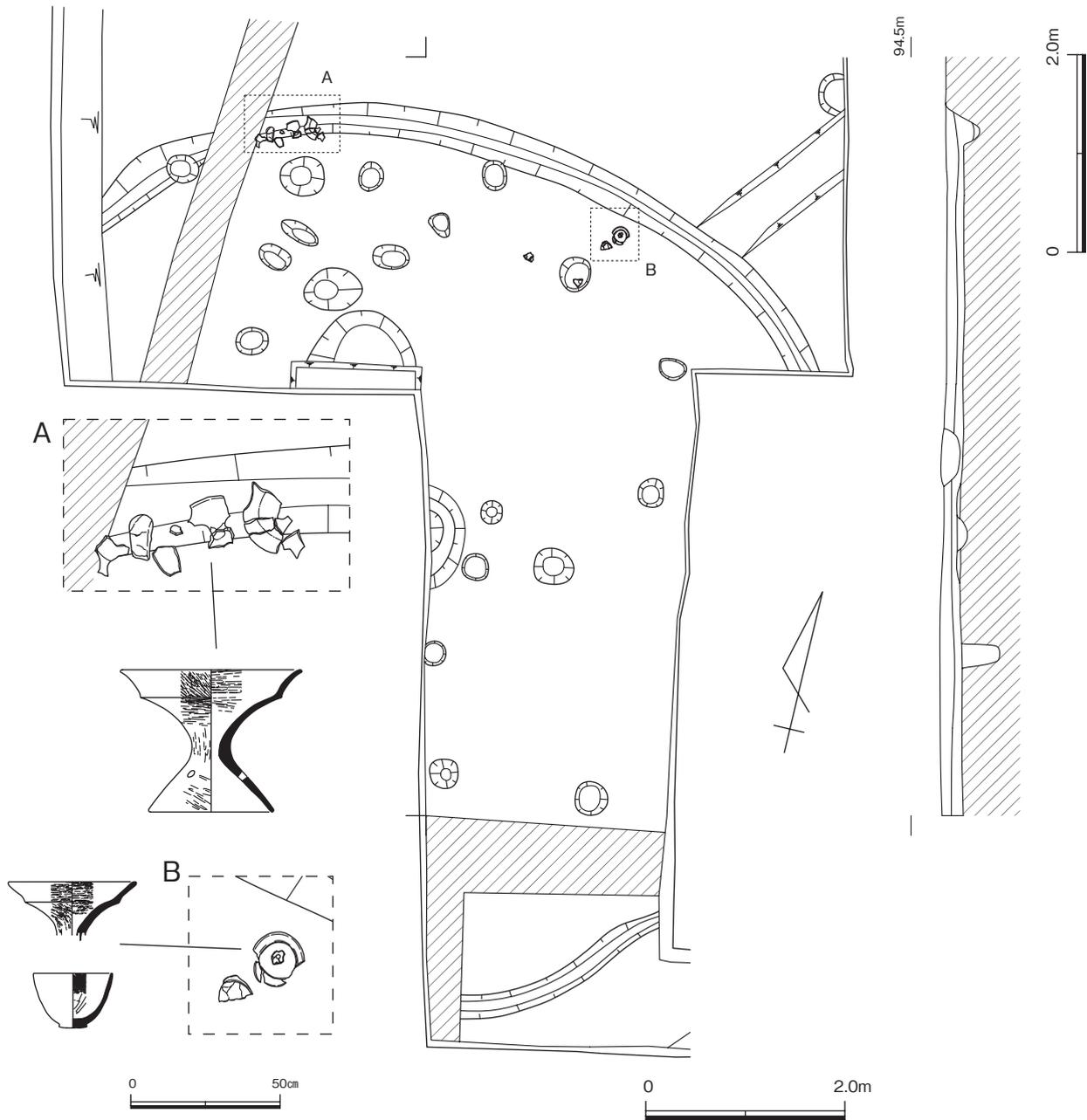
調査区南側において検出した円形竪穴住居跡。

調査区の関係で全体を検出することはできなかったが、住居跡の約3/4弱を検出した。住居跡の規模は径約9m、検出面から床面までは約20cmをはかり、周囲には幅約20～30cm、深さ約15～20cmの周壁溝がめぐり、床面積は約67㎡に復元できる。中央土坑はわずかに調査区にかかるかたちでの検出であったが、土坑周囲には床面より約4cm程度の高まりが土手状にめぐり、床面検出時に確認できたピット状遺構は13基あるが、支柱穴を特定することはできなかった。しかしながら、住居跡の周溝に沿って巡る柱穴によって構成されるものと思われる。住居跡床面付近からは、北側周溝付近の2ヶ所で器台(1・2)と鉢(3)がまとまって出土した。(1)は周溝埋土の上面での検出である。そのほか、床面で検出したP8から砥石(S1)が出土している。

〈出土遺物〉

住居跡床面付近からは(1～4)が出土した。(1)(2)は北近畿系の複合口縁器台で、「く」の字形に屈曲して開く口縁部と3方に円形穿孔をもつ内湾気味の裾部をもつ。屈曲部の下方への肥厚はみられない。(3)は碗形の鉢で、比較的器壁が薄く、外面ナデ調整、内面は口縁部付近にハケを施した後、胴部から底部にかけて板状工具によりナデ調整される。(4)の甕底部は、外面にタタキ、内面にはハケ調整が施される。P8出土の砥石(S1)は長辺7.3cm、幅1.5cmの成形された小形のもので、泥岩が使用されている。

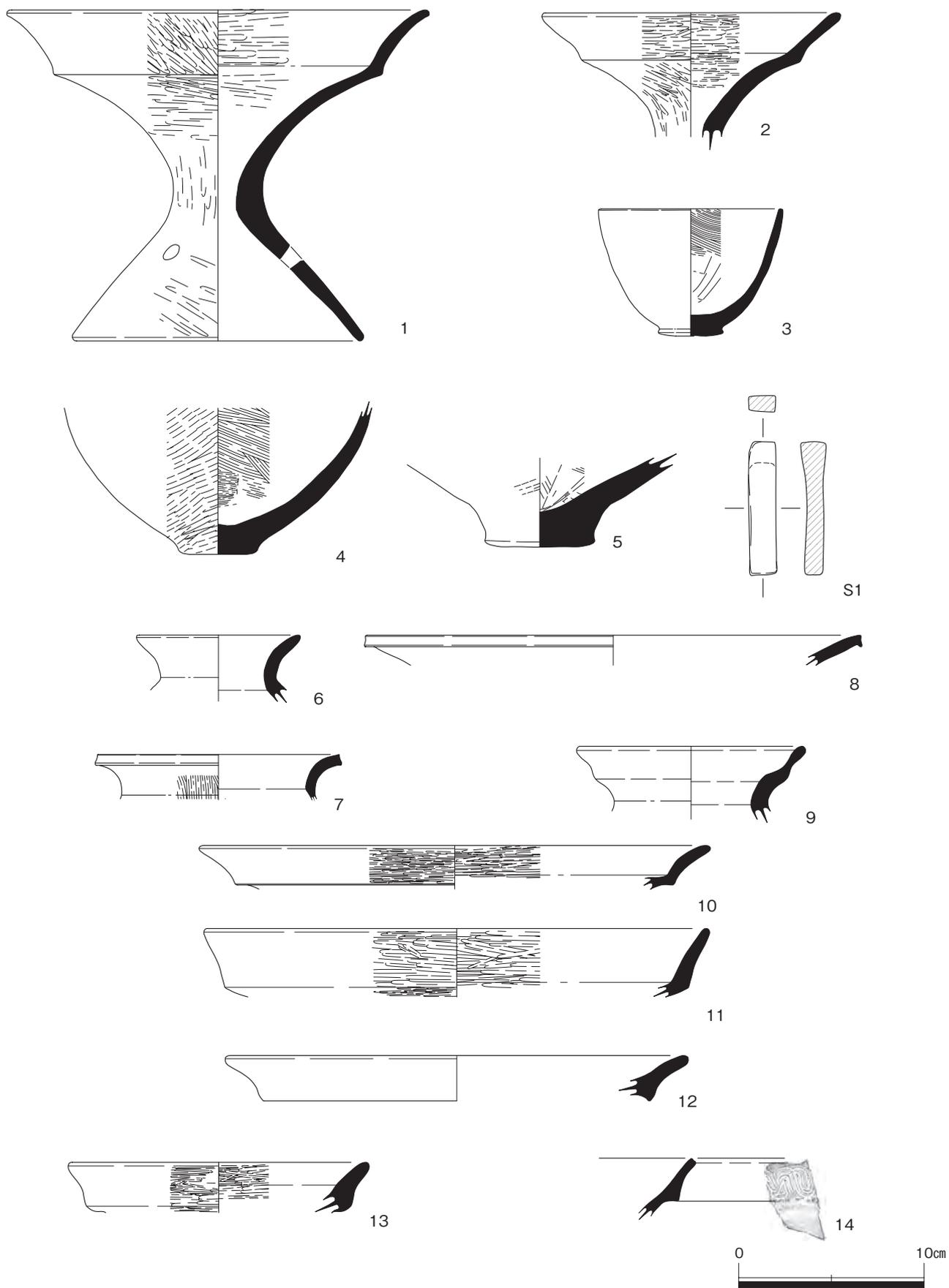
住居跡埋土からはコンテナ2箱分の土器が出土したが、小片が多く、図化できたのは一部である。(6～14)は壺口縁部で、短く屈曲して開く二重口縁が目立つ。(14)は口縁部に波状文が施される。(15～23)の甕では、口縁端部を丸くおさめるもの(16～18)、庄内甕の影響を受け、口縁端部をつまみあげるもの(19・20)、北近畿系の口縁端部を拡張して擬凹線を施すもの(22・23)がある。(37～39)は鉢で、口縁部が短く『く』の字形に外反するもの(37)、上方に拡張して擬凹線を施すもの(38)がある。高坏では北近畿系の体部が屈曲して内傾し口縁端部が短く立ち上がる碗形の(39)と屈曲して大きく開く口縁端部をもつ(40～43)がある。(40)の屈曲部は下方に



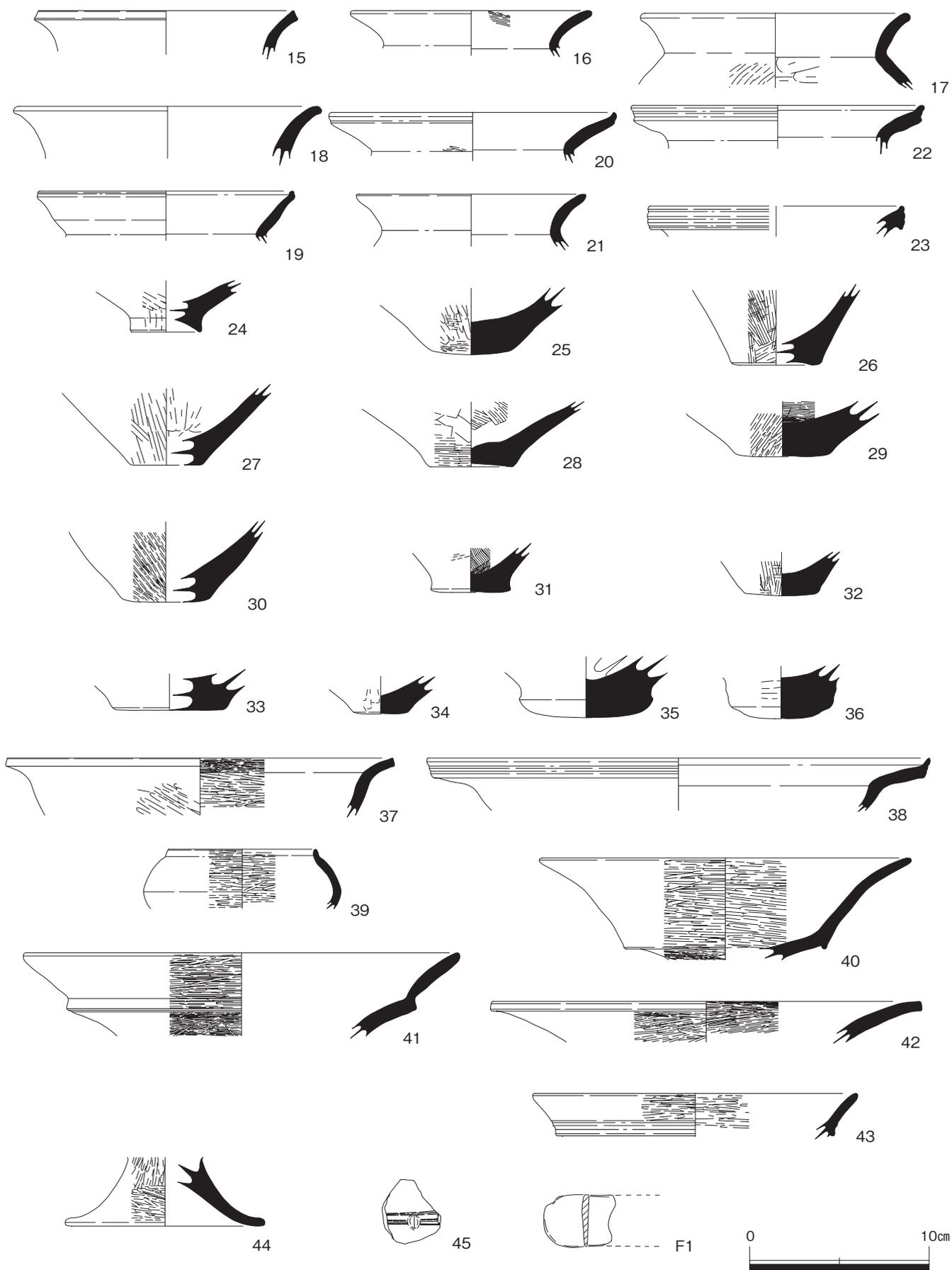
第5図 竪穴住居跡

肥厚する。(43)は器台になると思われるが、屈曲部に2条の擬凹線を施す。(45)は部分的に破片であるが、屈曲部に凹線と刻み目がみられ、装飾壺もしくは手焙り形土器の一部の可能性はある。

(F1)は不明鉄器。これらの土器は床面付近も埋土出土のものも大きな時間差はみられず、弥生時代終末～庄内期におさまるものと思われる。



第6図 豎穴住居跡 出土遺物①

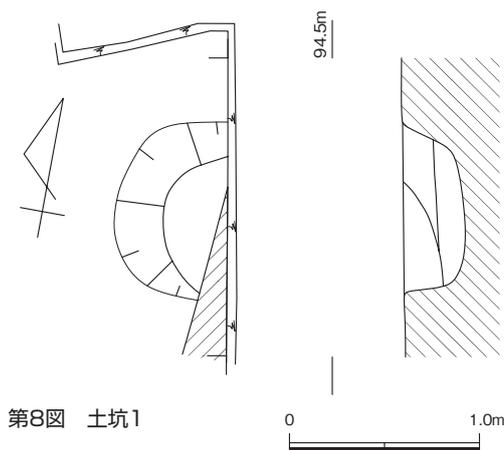


第7図 竪穴住居跡 出土遺物②

2 土 坑

【土 坑 1】

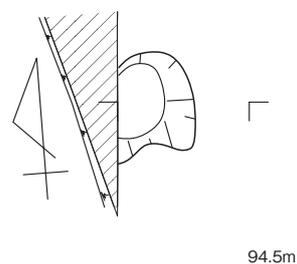
土坑1は調査区北端で約半分がかかるかたちで検出した。検出部は直径約95.5cmの円形で、深さは約30cmをはかる。土坑南端は一部埋設電線の掘削によって攪乱を受けている。埋土は上層の灰褐色土と下層の黒褐色土の2層にわかれる。埋土からの出土遺物は小片であるため図化し得なかったが、下層より奈良時代の須恵器片が出土している。



第8図 土坑1

【土 坑 2】

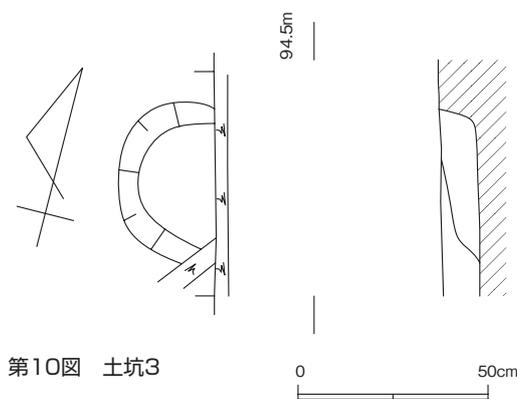
調査区の西端で検出された不整形円形の土坑。土坑1と同じく土坑西端を埋設電線によって切られている。径は広いところで約60cm、深さは約10cmをはかる。埋土には黒褐色土が堆積しているが、遺物の出土は見られなかった。



第9図 土坑2

【土 坑 3】

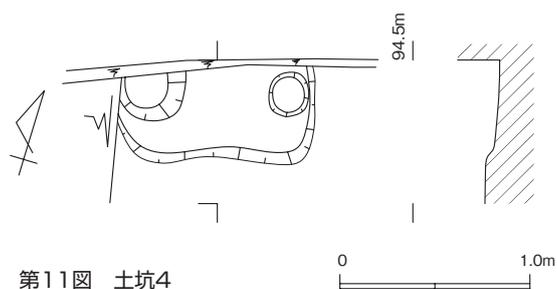
調査区中央部東端で一部がかかるかたちで検出した円形土坑。検出部分の径約42cm、深さ7.4cmをはかる。埋土には黒褐色土が堆積しているが、遺物の出土はみられなかった。



第10図 土坑3

【土 坑 4】

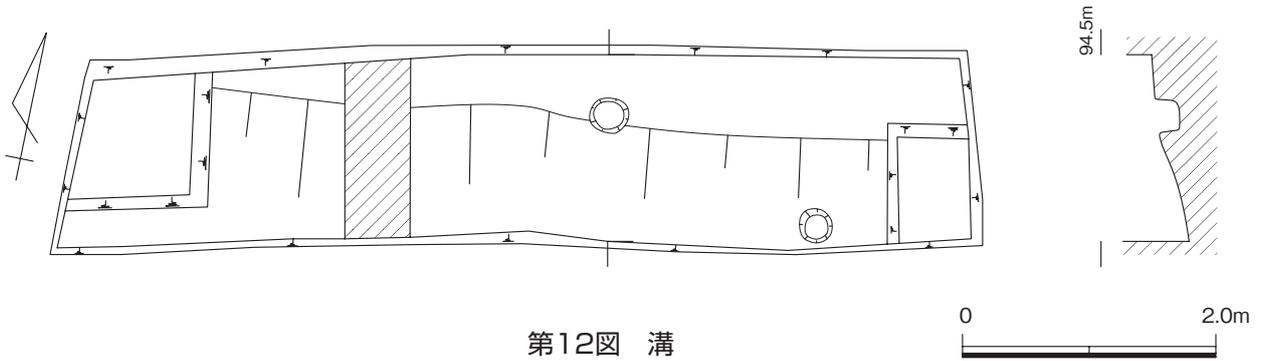
調査区中央部西端で、一部がかかるかたちで検出した土坑。長径1.6mの隅丸長方形を呈し、深さは約5cmをはかる。埋土には灰褐色土が堆積する。埋土から13世紀後半～14世紀前半の羽釜(46)が出土している。



第11図 土坑4

3 溝

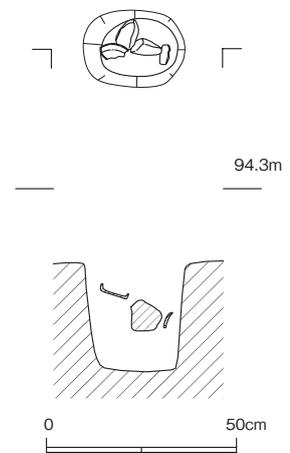
調査区南端において、東西に走る溝の肩を検出した。地形的な落ち状遺構の可能性もあるが、埋土が砂礫層を中心とする堆積であることから、溝状遺構と判断した。検出した深さは約30cmをはかる。埋土からの出土遺物は小片であるため図化し得なかったが、中世期の遺物小片が出土している。



4 ピット状遺構

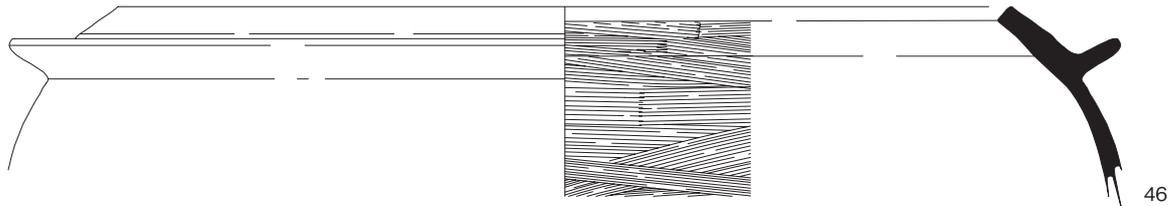
ピット状遺構は35基検出された。そのうち、主に中世期以降の遺構内に堆積する灰褐色の埋土のものが21基、中世期以前の遺構内に堆積する黒褐色土の埋土のものが14基検出されたが、調査区内での建物の構成は確認できなかった。P 1 は径26.7×20.5cmの楕円形で深さは30cmをはかる。ピット状遺構埋土出土の遺物は大半が小片で、図化できるものは少ない。

(47) は12世紀後半頃の須恵器小皿。(48) ～ (52) は口縁端部をつまみあげ状におさめる京都系の土師器皿。

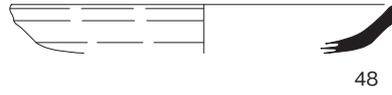
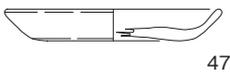


中町南小学校生徒
現地説明会風景

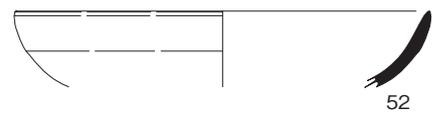
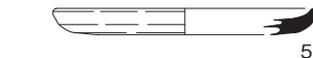
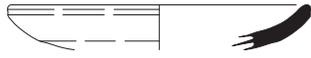
SK-4



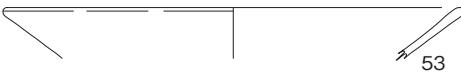
P1



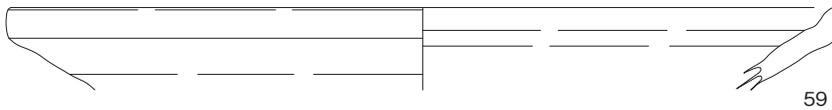
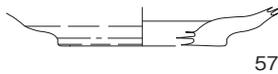
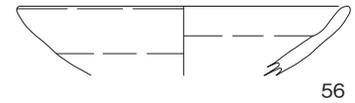
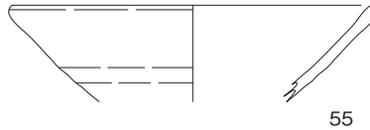
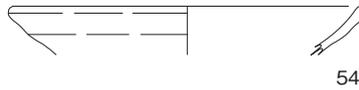
P11



P33



包含層



第14図 ピット状遺構及び包含層出土遺物

Ⅱ ま と め

1 森本・上島原遺跡の調査

森本・上島原遺跡は、平成元年に中町南小学校改築に伴う発掘調査で発見された遺跡である。¹⁾

調査では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡5棟、古墳時代後期の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟が検出され、杉原川西岸の段丘上に位置する集落の存在が明らかとなった。中でも、竪穴住居跡5は、径約11mをはかる円形の大型住居で、集落の首長の住居もしくは共同施設と考えられている。また、住居跡埋土からは山陰系甌や河内産の庄内土器が出土しており、直接または間接的な南北の広域な交流、流通があったことが指摘されている。²⁾ 平成13年には、当遺跡が位置する中町南小学校から、運動場をはさんで約180m南において、町道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生時代終末期の溝や中世前半期の建物跡が検出されており、³⁾ 溝からは庄内甕の破

片が出土している。調査時期や地点の字名が異なることから、森本・村内遺跡とされているが、森本・上島原遺跡と同じ自然堤防上に位置し、近接することから同じ集落を構成しているものと思われる。

今回の調査では、弥生時代終末期の竪穴住居跡1棟のほか、平安時代末頃の土坑、柱穴群が検出された。弥生時代終末期の竪穴住居跡からは北近畿系を中心とした土器が出土しているものの、庄内甕の影響を受けた土器も数点みられ、町内の当期における他の遺跡同様、北近畿土器様式の南限にあたる当地域の複雑な様相を示している。平成元年度の調査成果とあわせると、森本・上島原遺跡は弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代後期、中世前半期の3期に活発な集落活動が行われた遺跡であると言える。

2 多可町の弥生時代の遺跡

多可町内の弥生時代の遺物、遺構が確認されている遺跡は42遺跡を数える。そのうち、中区地域に31遺跡が集中する。これは、各区における調査数の多少によるものが多いと思われるが、中央に比較的広い平野部を有する中区の地形的要因も大きいものと考えられる。

弥生時代前期では8遺跡が上げられ、そのうち、遺構が確認されているのは坂本・土井の畑遺跡、清水・山城遺跡のみで、他の6遺跡では包含層等からの遺物が確認されている。その分布をみると、中区中央平野部（4遺跡）、中区北部平野部（2遺跡）、加美区南部（1遺跡）、加美区北部（1遺跡）にみられ、多可町中央部を流れる杉原川両岸に広がる平野部を中心として分布しており、稲作等の弥生時代の文化情報の伝播が杉原川をさかのぼって伝えられたことがうかがえる。

弥生時代中期前葉から中葉では、熊野部遺跡で竪穴住居跡、安坂・津ぶら遺跡で溝が確認されているが、遺物のみ出土した遺跡を含めた遺跡数においても、前期からの大幅な変化はみられない。しかしながら、中期後葉になると遺跡数は大幅に増加する。前期～中期前葉の遺跡の分布がみられた多可町中央部の各平野内部での増加のほか、加美区の比較的広がった谷扇状地、八千代区では野間川・大和川・仕出原川の合流付近に広がる谷底平野部にも遺跡が確認される。このことは、中期後半の、生産技術や社会の安定化に伴う人口増加により、耕地拡大や分村にみられる集落増加の現象を表していると考えられる。こうした集落の中でも、中区北部平野の思い出遺跡、中区中央平野の安坂・城の堀遺跡は、古墳時代以降へ継続し、地域の拠点的な役割を担う集落へと成長していく。一方、豊部・森内遺跡、西安田宮ヶ谷・長坂遺跡、糶屋・祇園神社遺跡、糶屋・上池遺跡など、谷奥部や見晴らしのよい山頂に占地し、中期後半に出現し後期へ継続しない集落もあらわれ、その特殊性が注目される。

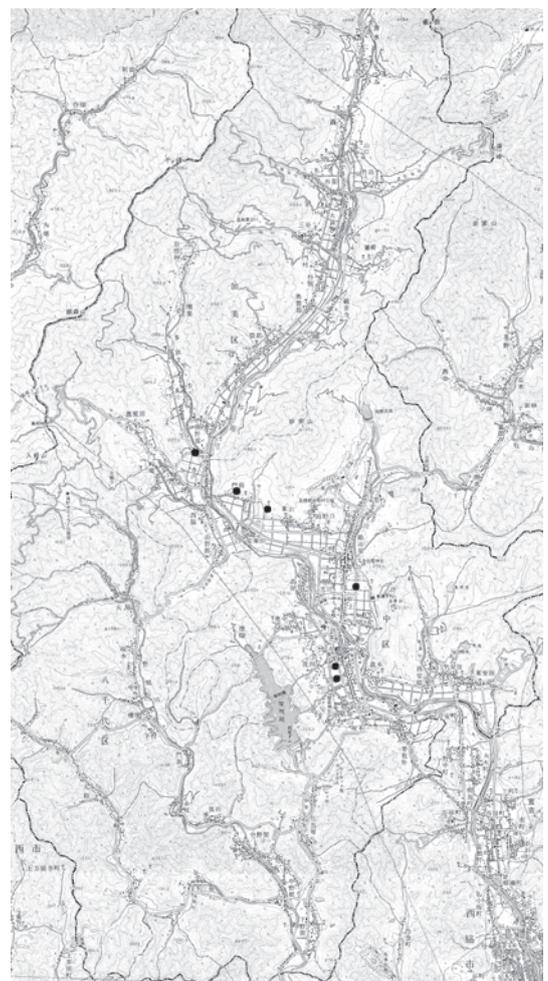
弥生時代後期に入ると、前半には一旦遺跡数は大きく減少した後、後期末～庄内期にかけて再び遺跡数の急増現象がみられる。その分布を見ると、中期後葉に遺跡の存在した同エリアに（各平

野部) 若干立地を変えながら出現し、特に中区北部平野、中央平野では面的な広がりを持って分布する。この現象は、発掘調査の件数や場所の違いによる結果である可能性は否定できないが、西播磨の揖保川中流域に見られる後期前半の遺跡の欠如に象徴されるような、中期～後期への大きな社会変動現象、集落動態の変化の一端を示している可能性が強い。播磨沿岸部では中期には、播磨の独自の地域色を持ちつつ、大きくは中部瀬戸内系の影響下にあった土器が、後期後半には畿内の様相に変化することが指摘されている。しかし、同じ播磨地域でも東北端に位置する当地域での土器の様相をみると、中期までは播磨沿岸部と同じ様相を呈し、中期後葉～後期前半には、集落分布の増減現象などから、播磨沿岸部と同様、大きな社会変動がうかがえる状況にあるものの、その後の後期後半～庄内期に増加する遺跡から出土する土器には、丹波・丹後を中心とする北近畿系や、山陰系の土器の影響が強くみられ、畿内中央部に包括されていく播磨沿岸部とは違った方向性を持つ社会へと変化したと考えられる。以上のように、多可町内の弥生時代の遺跡分布では、遺跡数が急増し、特殊な立地のみられる遺跡が出現する中期後葉、後期前葉の遺跡数の減少を経て、北近畿系・山陰系の影響の強い遺跡の急増がみられる後期後葉の二つの画期がみられる。

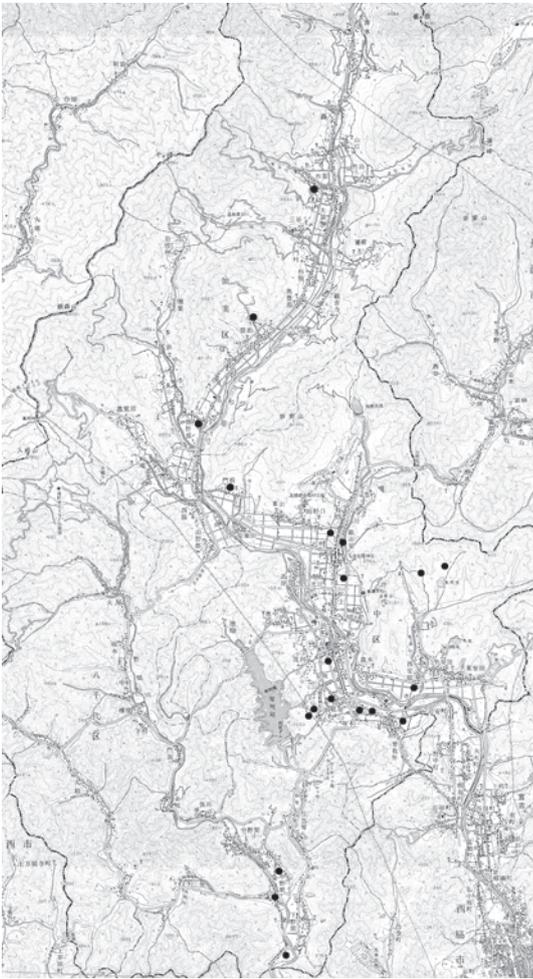
- 註 (1) 宮原文隆『森本・上島原遺跡』(1993) 中町教育委員会
 (2) (1) に同じ
 (3) 本書第IV付章



第15図 弥生時代前期遺跡分布図



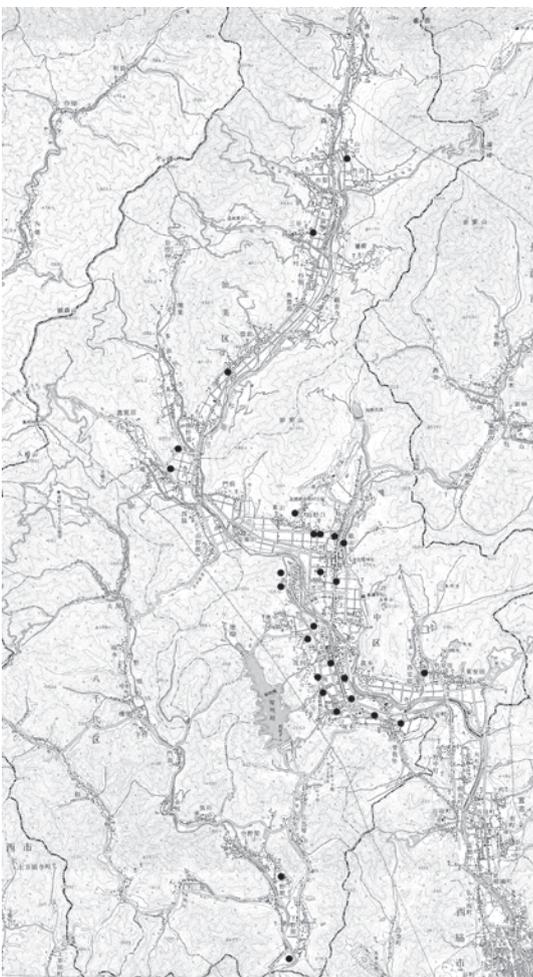
第16図 弥生時代中期前葉～中葉遺跡分布図



第17図 弥生時代中期後葉遺跡分布図



第18図 弥生時代後期前葉遺跡分布図



第19図 弥生時代後期後葉～庄内期遺跡分布図

土器観察表

報告書No.	出土場所	器種	口径	底径	高さ	調整等 内 面	調整等 外 面	備 考	色 調	実測 No.
1	SB	器台	22.5	15.6	18.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR7/6橙	41
2	SB	器台	15.7	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		10YR8/3浅黄橙	42
3	SB	鉢	9.7	3.5	6.9	ハケ 底部付近ヘラ状工具によるナデ	ナデ		2.5Y8/3浅黄橙	44
4	SB	底部	—	4.1	—	ハケ	タタキ		2.5Y8/3浅黄橙	43
5	SB	底部	—	5.9	—	板ナデ→ハケ	タタキ→ナデ		外面5YR7/6橙 内面10YR8/1灰白	45
6	SB	壺	8.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		5YR6/6橙	17
7	SB	壺	13.0	—	—	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 頸部～体部ハケ		10YR8/2灰白	21
8	SB	壺	26.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		2.5Y8/3淡黄	20
9	SB	壺	12.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		10YR8/1灰白	27
10	SB	壺	27.4	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR7/6橙	4
11	SB	壺	27.0	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.5YR8/4浅黄橙	6
12	SB	壺	24.6	—	—	ナデ	ナデ		10YR8/1	26
13	SB	壺	15.9	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		2.5YR6/6橙	22
14	SB	壺	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ 口縁部波状文		外面10YR8/4浅黄橙 内面5YR6/8橙	24
15	SB	甕	14.1	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		7.5YR8/3浅黄橙	11
16	SB	甕	13.1	—	—	ヨコナデ ハケ残る	ヨコナデ		7.5YR8/3浅黄橙	12
17	SB	甕	14.6	—	—	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ		7.5YR8/4浅黄橙	13
18	SB	甕	16.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		7.5YR8/4浅黄橙	14
19	SB	甕	14.1	—	—	ヨコナデ 端部つまみ上げ	ヨコナデ		2.5Y8/3淡黄	18
20	SB	甕	15.7	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部界に 一部ヘラミガキ口縁部凹線1条		7.5YR7/6橙	15
21	SB	甕	12.7	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		外面スス 内面10YR5/6明赤褐	19
22	SB	甕	16.1	—	—	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ヨコナデ 口縁部2条擬凹線		10YR8/3浅黄橙	16
23	SB	甕	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ 口縁部擬凹線3条		7.5YR7/3にぶい橙	23
24	SB	底部	—	3.8	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		2.5YR6/6橙	40
25	SB	底部	—	4.3	—	ナデ	タタキ→ヘラミガキ		外面7.5YR5/2灰褐 内面5YR6/4にぶい橙	36
26	SB	底部	—	4.9	—	ヘラケズリ	タタキ→ハケ		2.5Y8/3淡黄	37
27	SB	底部	—	4.0	—	ヘラケズリ	ハケ+ナデ		10YR5/2灰黄褐	38
28	SB	底部	—	4.6	—	ハケ+ナデ	ハケ+板ナデ		2.5Y8/3淡黄	33
29	SB	底部	—	5.1	—	ハケ	タタキ		10YR8/3浅黄橙	34

報告書No	出土場所	器種	口径	底径	高さ	調整等 内 面	調整等 外 面	備 考	色 調	実測 No
30	SB	底部	—	4.6	—	ヘラケズリ	タタキ		2.5YR5/4にぶい赤褐	28
31	SB	底部	—	4.4	—	ハケ	タタキ→ナデ		2.5Y5/2暗灰黄	39
32	SB	底部	—	4.0	—	ナデ	タタキ→ハケ スス付着		2.5Y8/3淡黄	29
33	SB	底部	—	6.3	—	—	ヘラミガキ		10YR8/3浅黄橙	35
34	SB	底部	—	3.0	—	ヘラケズリ	板ナデ		10YR8/3浅黄橙	31
35	SB	底部	—	7.4	—	ナデ	ナデ 底面木葉文		10YR8/2灰白	32
36	SB	底部	—	5.6	—	ヘラケズリ	タタキ		5YR7/6橙	30
37	SB	鉢	21.5	—	—	口縁端部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ→ヘラミガキ		5YR7/6橙	5
38	SB	鉢	27.9	—	—	荒れて不明	荒れて不明		2.5Y8/2灰白	8
39	SB	高坏	8.2	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丹後系(丹後西谷式)	5YR6/8橙	25
40	SB	高坏	20.4	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		10YR7/3にぶい黄橙	1
41	SB	高坏	24.1	—	—	ヘラミガキ?	ヘラミガキ		10YR8/3朝黄橙	3
42	SB	脚部	—	23.8	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ		10YR8/3浅黄橙	9
43	SB	器台	17.9	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ 屈曲部凹線2本		10YR8/3浅黄橙	7
44	SB	脚部	—	11.1	—	ナデ	ヘラミガキ	接合部は、補強のため、 底部に刺突痕を付ける。	7.5YR7/6橙	2
45	SB	不明	—	—	—	ナデ	上半部ナデ+ヘラミガキ 下部タタキ+ナデ		7.5YR8/4浅黄橙	10
46	SK4	羽釜	35.3	—	—	ハケ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	同一個体と思われる胸部 中位の破片にはタタキ	7.5YR8/3浅黄橙	57
47	P1	小皿	9.4	6.3	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切り		N7/灰白	61
48	P1	皿	15.1	—	—	ナデ	口縁部ナデによる凹 体部上半ナデ	京都系土師器	5YR7/6橙	53
49	P1	皿	—	—	—	ナデ	口縁部ナデによる凹 体部上半ナデ	京都系土師器	5YR7/6橙	55
50	P11	皿	11.7	—	—	ナデ	口縁部ナデによる凹 体部上半ナデ	京都系土師器	5YR7/6橙	54
51	P25	皿	10.2	8.8	1.0	ナデ	口縁部～体部ナデ 底部未調整		2.5YR6/8	56
52	P32	皿	16.3	—	—	ナデ	口縁部ナデによる凹 体部上半ナデ	京都系土師器	5YR7/6橙	52
53	P33	山茶碗	17.8	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		N7/灰白	62
54	包含層	山茶碗	13.8	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		5PB7/1明青灰	46
55	包含層	山茶碗	14.2	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		N8/灰白	47
56	包含層	山茶碗	13.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		—	48
57	包含層	山茶碗	—	6.6	—	ヨコナデ	底部回転糸切		10Y8/2灰白	49
58	包含層	山茶碗	—	5.2	—	ヨコナデ	底部回転糸切		10Y8/1灰白	51
59	包含層	鉢	32.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ		5B7/1明青灰	50

IV 付章 森本・村之内遺跡発掘調査概要

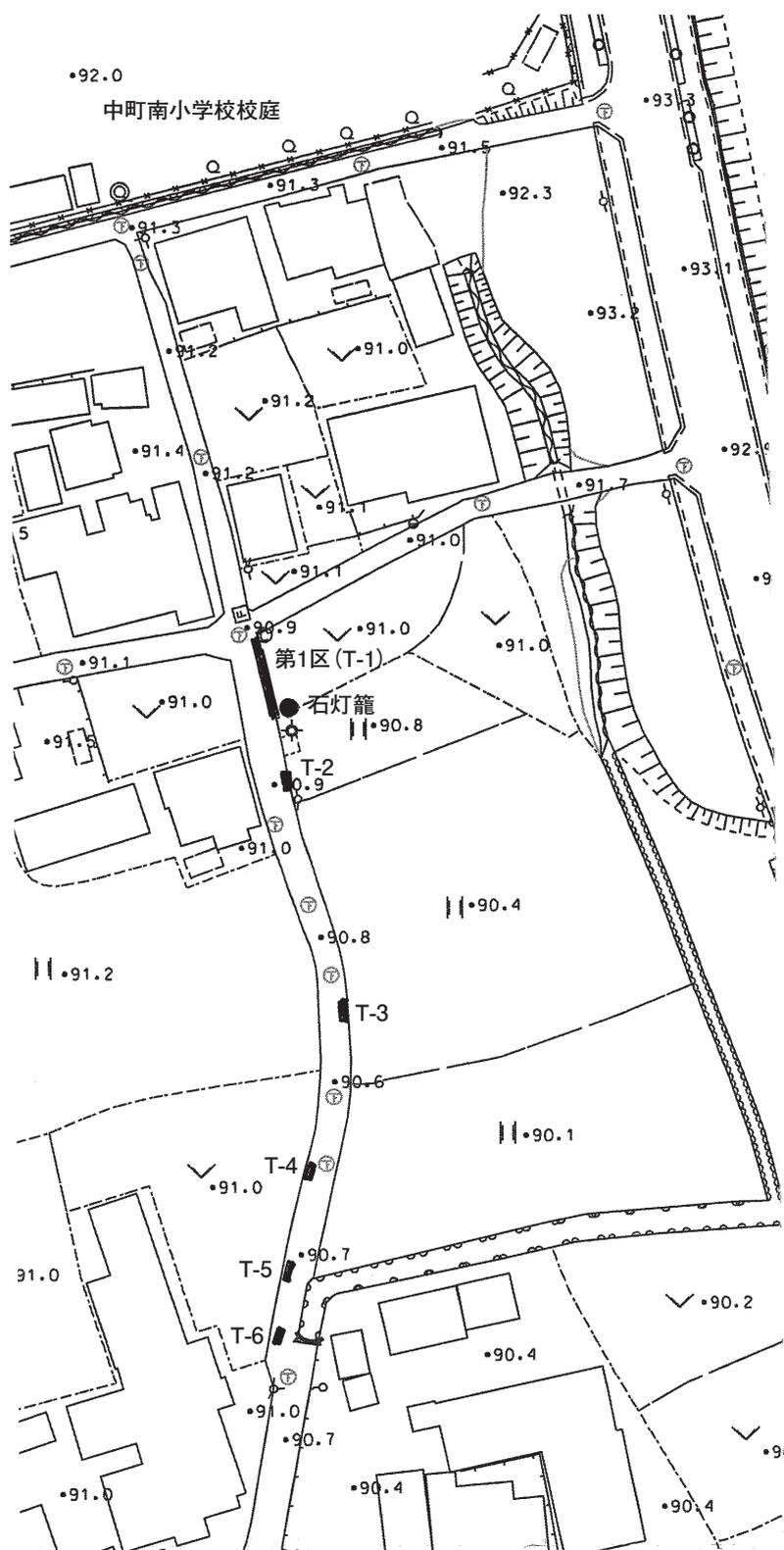
1. はじめに

平成元年（1989）に中町南小学校校内で発見され、発掘調査が実施された森本・上島原遺跡は、杉原川により形成された自然堤防上に位置している。当時の発掘調査地点より校庭を挟んだ南方で、町道森本3号線の整備事業が行われることとなった。

対象地域は現集落が密集しており、また文化財の確認調査が実施されることがないため遺跡の存否は明らかでなかった。しかしながら地形的には森本・上島原遺跡と同様に自然堤防上に位置することから、遺跡が存在する可能性があると考えられた。

2. 調査の方法・調査期間・調査体制

調査は、現況で可能な部分についてトレンチを設定し、確認調査を実施した。トレンチは計6カ所（T-1～6）を設定して調査を進めた結果、T-1において、弥生時代及び中世の遺構を検出した。その調査成果をもとに、遺構が保存できない部分について本発掘調査（第1区）を実施した。



第20図 調査位置図

(S=1:1,000)

調査期間

確認調査

平成13年（2001）1月29日・30日

本調査

平成13年（2001）2月9日～14日

調査体制

調査機関 中町教育委員会(当時)

調査担当者 管理課 宮原文隆

調査補助員 笹倉崇司、藤原 敏、
早崎喜代美

発掘調査・整理調査参加者

小林千代美、藤井公仁子、藤田玲子、
松田優子、宮崎信一、迎山耕三、
吉田衣里

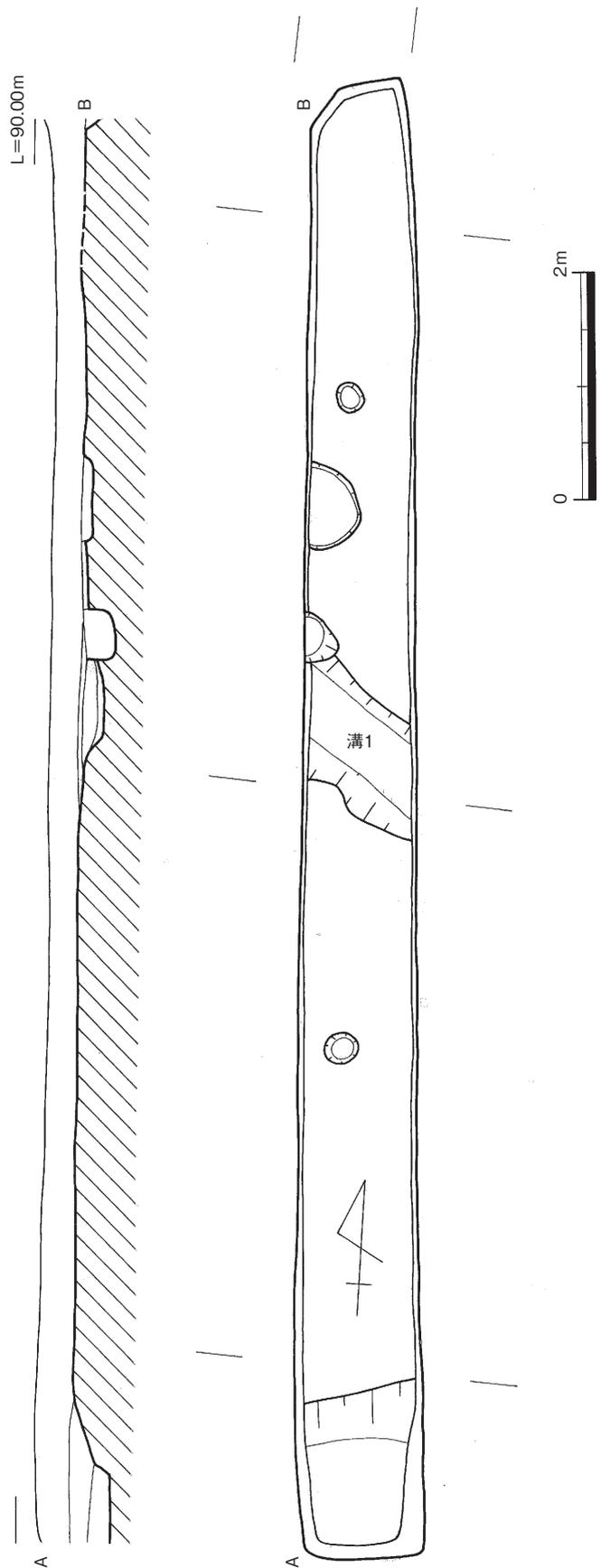
3. 調査の概要

T-1・第1区

この調査区では溝・柱穴・落ち込みが検出されている。

溝1は幅約1m、深さ約20cmを測り、東西に流路を有する。この溝の埋土は2層に分層が可能で、上層（第1層）が黄灰色砂礫層が厚く堆積し、下層（第2層）の黄灰色砂層溝底部に薄く約5cm堆積する。比較的多くの水が流れていた状況を呈する。

溝内からは弥生時代終末期の土器が小片化して出土しており、このうち6点（1～6）が図化できた。（1・2）は甕である。（2）は体部片であるが、外面は1cm当たりに約4本の条線を有する細かい平行叩きの後に部分的な刷毛調製、内面には刷毛後篋削りが施され、器壁は2～3mmと薄く仕上げている。胎土



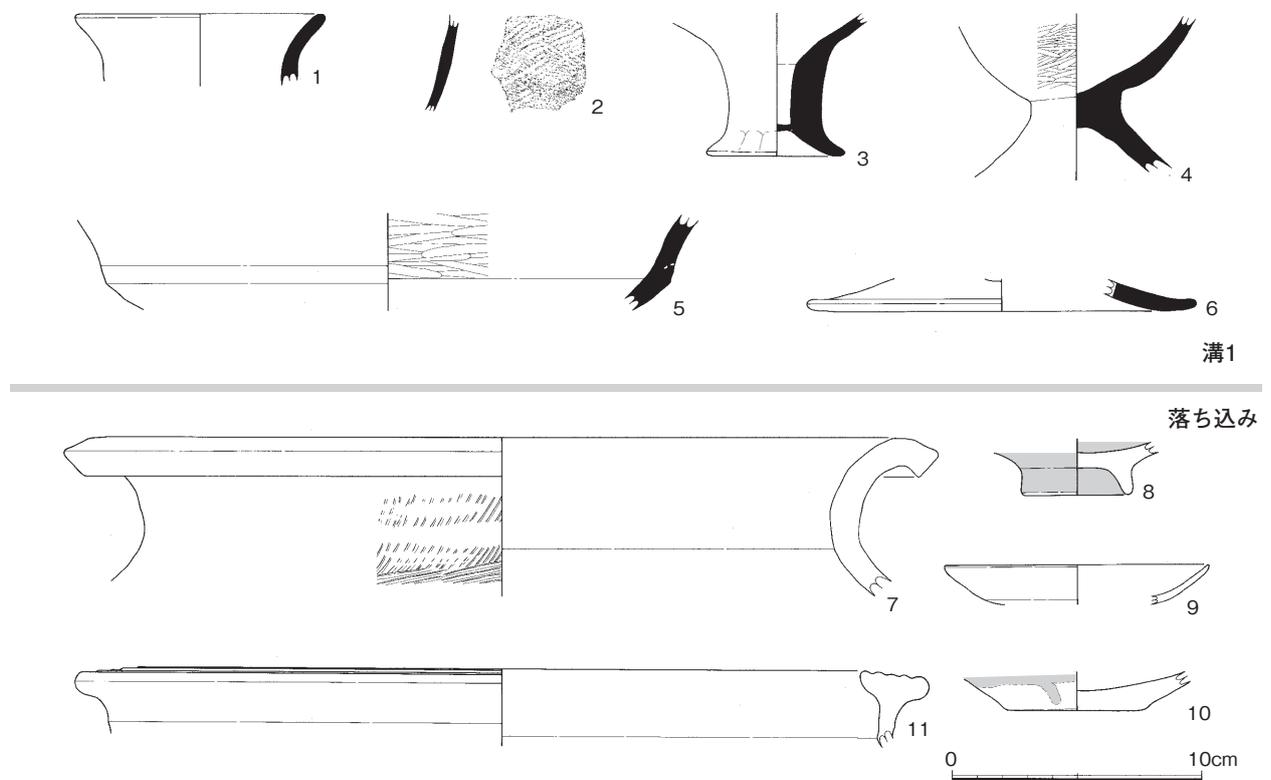
第21図 第1区遺構図

は細かい砂粒を含み、色調は浅黄橙色を呈する。小片であるが、いわゆる庄内甕の属性を有している。(3)は、一見高坏の脚部と見間違ふような形態であるが、脚台部が完結しているのでやや特殊な形態を呈する鉢と考えるべき。脚台部は指頭圧痕によって仕上げられている。(4～6)は高坏であるが、小片のため全形を窺うことはできない。

柱穴は3基検出したが、調査範囲の制約から配列状況は明らかにしえない。径20～40cm、深さ13～20cmを測る。柱穴埋土内の出土遺物から、鎌倉時代前後の時期と推定される。

調査区の南端は落ち込む。この上層ににぶい黄色土層、下層に褐灰色土層が堆積している。特にこの埋土は、人為的な埋め込みが行われた状況を示している。これは調査区の南側に存在する石灯籠と関係しているのであろう。地元の人々の話では、この石灯籠から川側(東側)に延びる畦畔が「参道」で、三角形に残る圃場が「ドウヤシキ」と呼ばれていることから、それに関する石灯籠と推定される。すなわち、落ち込み位置は参道部分に対応しており、人為的な埋め込みは参道部の地盤改良が行われた事を示すものと考えられる。埋土内からは、中世～近世の遺物(7～11)が出土している。(7)は中世の須恵器甕で紛れ込みの遺物であろう。(8～11)は近世の遺物で、(11)は丹波焼甕である。

さて、石灯籠自体はアカリをともし火袋がコンクリート製で新しいことがうかがえるが、他の部位は基本的に自然石を組んで立てられており、刻銘等は看取できない。地表面からの高さ約170cmを測る。地元で伝えられているように、ここが参道であり「ドウヤシキ」と呼ばれる地点に、かつ



第22図 第1区出土遺物

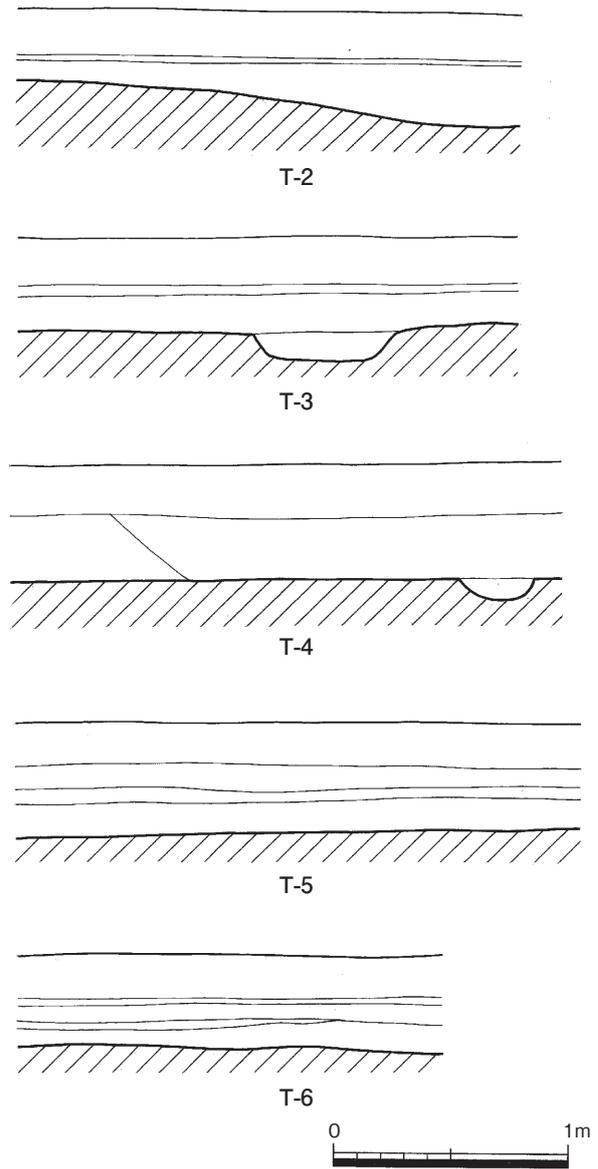
て小規模な堂宇が建っていた可能性は高いと思われる。

T-2・3

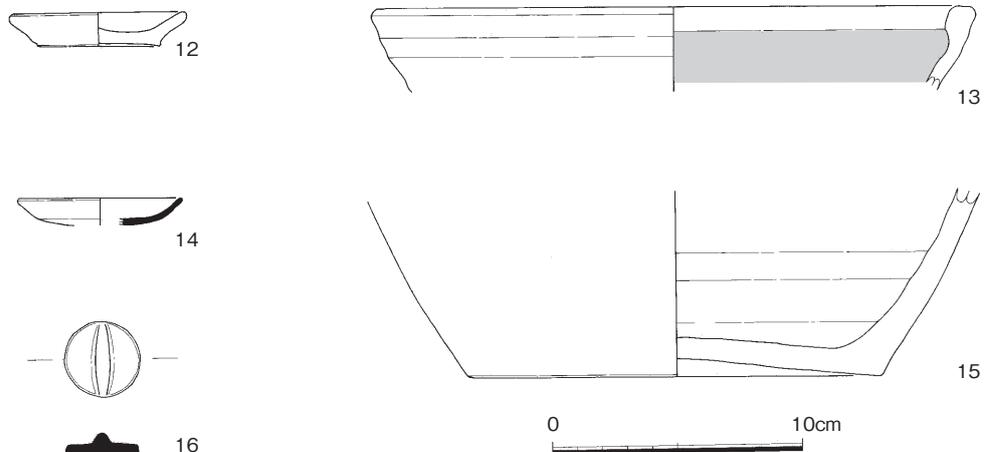
これらのトレンチでは、地形が北側に存在した自然堤防上から後背湿地に落ち込むような状況を呈する。埋土は、耕土・床土の下に褐灰色土層若しくは黒褐色土層が10～30cm堆積し、地山はT-2で砂礫層、T-3で砂質土層となる。双方のトレンチからは、平安時代～近世の土器が出土している。図化できたのは、T-2から出土した須恵器小皿(12)と近世の丹波焼灰釉鉢(13)である。

T-4～6

これらのトレンチは、開発予定地東側の一段高い圃場面となる。ここでは耕土・床土下に、20～30cmの堆積層を挟み、地山がいわゆる黒ボク状を呈する。地形的には自然堤防上に位置すると推定される。ここでは明確な遺構は検出できなかったが、地形的にはこの調査区の西側の地区には遺跡が存在している可能性は高いと思われる。遺物は平安時代～近代の土器が出土しているが、図化できたのは近世～近代の所産と考えられる(14～16)である。(15)は丹波焼甕底部、(16)は近代の泥メンコであろう。



第23図 T2～T6 土層図



第24図 T2～T6 出土遺物

4. 小結

今回の調査の結果、T-1において遺構が検出された。そしてその一部について第1区の本発掘調査を実施した。この第1区は狭い範囲ながらも、弥生時代終末期の溝1と中世前半の建物の一部を検出することができた。溝1では、庄内甕の破片が出土しており、注目される資料である。森本・上島原遺跡の1989年の発掘調査¹⁾において、河内地方より明らかに搬入された庄内甕が出土している。森本・村之内遺跡と弥生時代終末期の母村と推定される森本・上島原遺跡との関連が、庄内甕のあり方とともに検討されなければならない。

また、今回の調査対象となった町道森本3号線を挟んで西側と東側では、圃場面の高さが80～90cmの比高差を形成している。T-5・6では、遺構は検出できなかったが、地形的な状況から、この自然堤防として、安定した西方に遺跡が広がっていることを推し量ることができる。

1) 『森本・上島原遺跡』中町文化財報告3 中町教育委員会 1993

土器観察表

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		外面	内面	
1	8	第1区	溝1	弥生土器	甕	10.0	(2.9)	—	浅黄橙	横なで	横なで	
2	4	〃	〃	〃	〃	—	—	—	浅黄橙	平行叩き (4.5/10)	刷毛後篋削り	
3	1	〃	〃	〃	脚部	—	(5.7)	5.5	浅黄橙	脚部なで、 脚端部指頭圧痕	なで	
4	2	〃	〃	〃	高坏	—	(6.7)	—	淡黄	坏部篋磨き、 脚部横なで	横なで?	
5	5	〃	〃	〃	〃	—	(3.9)	—	橙	篋磨き?	篋磨き	
6	3	〃	〃	〃	〃	—	(1.3)	15.5	浅黄橙	横なで	横なで	円形透かしあり (個数不明)
7	18	〃	—	須恵器	甕	35.0	(6.4)	—	灰	口縁部ロクロナデ、 頸部～体部平行叩き	ロクロナデ	
8	14	〃	—	陶器	碗	—	(2.2)	4.5	淡黄	—	—	肥前系京焼風陶器
9	17	〃	—	〃	小皿	10.6	(1.6)	—	橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	16	〃	—	〃	皿	—	(1.6)	5.7	橙	体部ロクロナデ、 底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
11	19	〃	—	丹波焼	甕	34.2	(3.1)	—	灰黄	ロクロナデ、 口縁部端面凹線4条	ロクロナデ	
12	9	T-2	—	須恵器	小皿	7.1	1.4	5.0	灰白	口縁部ロクロナデ、 底部回転糸切り	見込み部仕上げなで	ロクロ回転時計回り
13	10	〃	—	丹波焼	鉢	24.2	(3.4)	—	明褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ、灰釉塗布	
14	12	T-4	—	土師器	小皿	6.6	(1.1)	—	黄橙	口縁部ロクロナデ、 底部なで	ロクロナデ	
15	11	〃	—	丹波焼	甕	—	(7.5)	16.5	明赤褐	ロクロナデ、 底部なで	ロクロナデ	全面に土部塗布
16	13	〃	—	土製品	メンコ	径3.0	—	—	黄橙	—	—	

・法量は () 現存高、—は不明である。

・成形・調整等の (/) は (本数/cm) である。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もりもと・かみしまばらいせき							
書 名	森本・上島原遺跡Ⅱ							
シ リ ー ズ 名	多可町文化財報告							
シ リ ー ズ 番 号	8							
編 著 者 名	安平勝利 宮原文隆							
編 集 機 関	多可町教育委員会							
所 在 地	〒679-1105 兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 Tel.0795-32-0685							
発 行 年 月 日	2009年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりもと かみしまばらいせき 森本・上島原遺跡	ひょうごけん たかぐん たかちやう なかく 兵庫県多可郡多可町中区 もりもとあざかみしまばら 森本字上島原	23833	中区番号 310	35度 02分 33秒	134度 55分 40秒	2008.6.17 ～ 2008.7.13	約100㎡	中町南小 学校中校 舎地震補 強・大規模 改修工事
もりもと むらのうちいせき 森本・村之内遺跡	ひょうごけん たかぐん たかちやう なかく 兵庫県多可郡多可町中区 もりもとあざむらのうち 森本字村之内	23833	中区番号 368	35度 02分 27秒	134度 55分 41秒	2001.1.29 ～ 2001.2.14	約30㎡	町道建設 工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
もりもと うえしまばらいせき 森本・上島原遺跡	集落跡	弥生時代～中世	弥生時代終末期 ～庄内期の竪穴 住居跡	弥生土器、須恵 器、土師器、鉄器				
もりもと むらのうちいせき 森本・村之内遺跡	集落跡	弥生時代～中世	弥生時代終末期 の溝 中世前半期の掘 立柱建物跡	弥生土器、須恵 器、土師器				

图版

図版1 森本・上島原遺跡(1)



周辺景(北方)



周辺景(東方)



調査前全景(北から)

図版2 森本・上島原遺跡(2)



調査区全景(南から)



調査区南側全景(南から)



調査区全景(北から)



調査区北側ピット状遺構群



竪穴住居跡



竪穴住居跡遺物出土状況(西側)



竪穴住居跡遺物出土状況(東側)



豎穴住居跡土層①



豎穴住居跡土層②



豎穴住居跡中央土坑部土層



土坑1



土坑2



土坑3



土坑4



溝土層



溝全景



P1検出状況



P1遺物出土状況

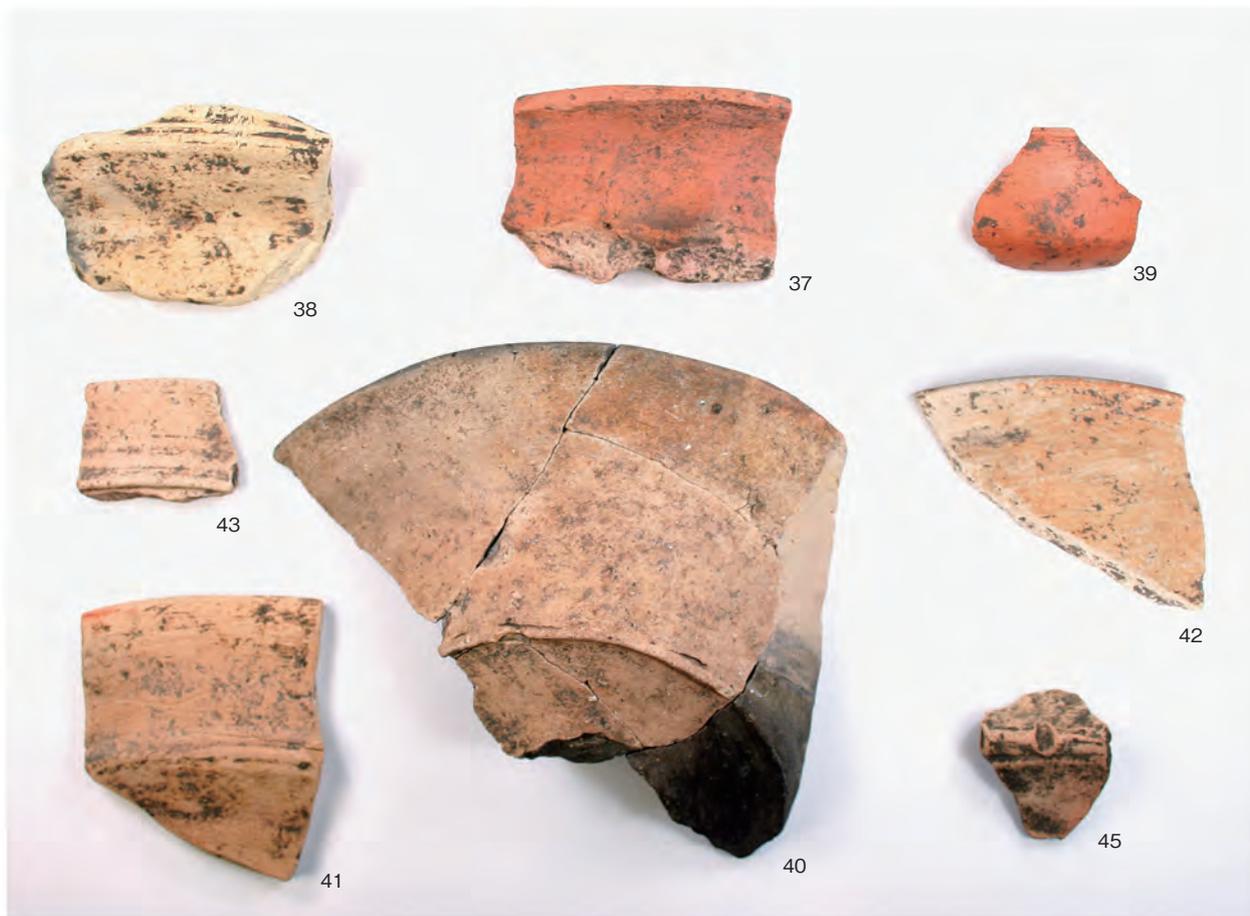
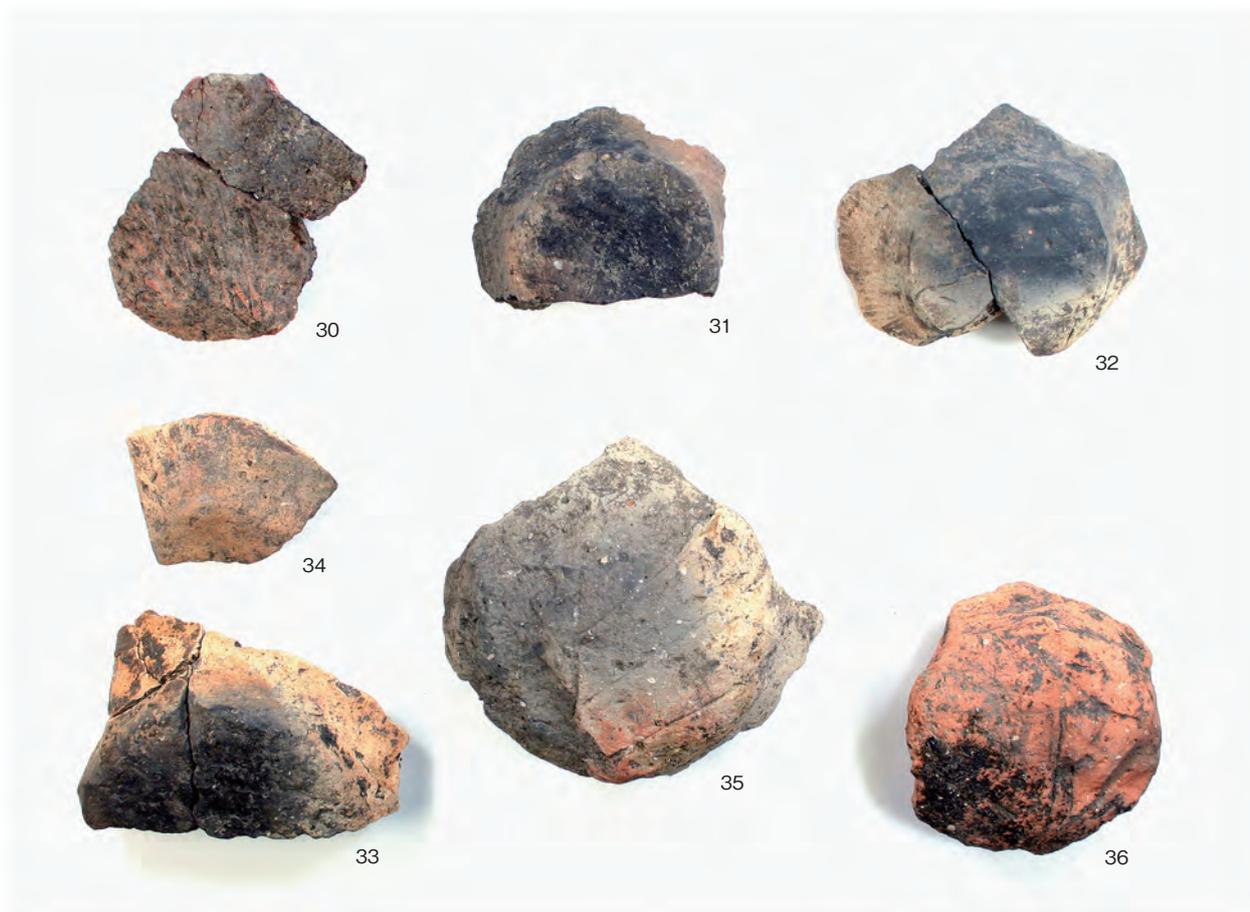
図版 8 森本・上島原遺跡(8)



出土遺物



図版10 森本・上島原遺跡(10)





図版12 森本・村之内遺跡(1)



調査前(南から)



調査前(北から)



石灯籠



第1区溝1 土器出土状況



第1区(南から)



第1区(北から)

図版14 森本・村之内遺跡(3)



T-4



T-5



作業風景



多可町文化財報告 8

もりもと かみしまばら いせき
森本・上島原遺跡Ⅱ

2009年3月31日

発行 多可町教育委員会
〒679-1134 多可郡多可町中区茂利20番地
TEL. (0795) 32-2385

印刷 株式会社吉本宝文堂

■データ 紙質 表紙 アートポスト 125kg
見返し 色上質 特厚口
本文 シルバーダイヤ 57.5kg
カラー図版 アート 93.5kg
文字 モリサワ
写真 スキャナー分解
製本 無線トジ